

### III 紹介 III

## 李福九著／金燦編・訳『北朝鮮弾道ミサイル最高機密』

澤 喜司郎

*Kishiro SAWA*

#### (I)

著者の李福九氏は、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の開城放送局で暗号通信業務に従事した後、国防大学に入学し、無線工学を専攻して軍事通信システムの開発に携わり、大学卒業後にはミサイル生産の一大軍需基地、熙川38号工場に勤務し、1997年に韓国に亡命するまでミサイル誘導装置の開発に携わっていた。本書は、編・訳者である金燦氏が著者に40時間以上に及ぶインタビューを行い、その証言をもとに構成されたものである。

本書の中で、著者は「北朝鮮軍は弱い」「時代遅れで実戦では役に立たない軍隊だ」「米韓軍は圧勝する」という議論こそ現実を無視した荒唐無稽な幻想だといい、「私が北朝鮮から韓国に亡命して、まず感じたのは、ほとんどの人が北朝鮮軍の本当の姿を知らなさ過ぎることであった。人間が生きていく上でその基礎となる国家を守るためには、それを脅かす敵国をできるだけ正しく知ることが不可欠ではないだろうか。何をするか分からない『ならず者国家』である北朝鮮については、とくにそうである」という。

本書は「私が北朝鮮の兵器工場でミサイル技師として勤務していた当時、直接見分した情報に基づいて、北朝鮮軍の真の実力をできるだけ正確に日本の皆さんに知ってもらいたいという願いから生まれたものである」としている。

なお、本書の構成は

- 序 章 仮想ドキュメント——北朝鮮軍、韓国へ  
侵攻
- 第1章 ミサイル生産基地の全貌

#### 第2章 北朝鮮ミサイルの恐るべき威力

#### 第3章 ミサイル輸出と外貨稼ぎ

#### 第4章 アメリカは北朝鮮のミサイルを怖がっている

#### 第5章 ミサイル技術者の亡命

#### 第6章 弾道ミサイルの恐怖からいかに逃れるか

#### 第7章 日本製品の流出を食い止める

であり、本稿では本書の内容を簡単に紹介したい。

なお、本書は06年7月の北朝鮮ミサイル発射事件を機に文庫版として刊行されたもので、原版は2003年4月に徳間書店から刊行されている。

#### (II)

北朝鮮では国内産業の生産性が低く、人口に占める軍人の割合が5%と高いため、「普通の国家経済」と「軍事専門の経済」があり、後者を「第2経済」と呼び、それを統括するのが国防委員会直属の第2経済委員会である。そして、北朝鮮の兵器工場はすべて第2経済委員会の傘下であり、国防委員会の委員長が金正日総書記であるということは北朝鮮の兵器工場はすべて金正日の直接の指揮下にあることを意味する。なお、北朝鮮には多数の兵器工場があるが、秘密保持のため、すべてカムフラージュ用の名称がつけられている。

代表的な兵器工場である江界26号工場は、しばしばミサイル本体をつくっているように考えられているが、それは事実ではなく、ここではミサイルの外装となる特殊鋼板をミサイルの形に成型しているだけで、他には携帯用のロケットランチャーや多連装ロケット砲などの生産を一手に引き受け、これらはミサイルと違っ

て外装だけでなく本体の製造も最後の組み立ても行われている。亀城1月8日工場は軍用機生産工場で、代表的な国産戦闘機に「革新2号」と「ミグ26」がある。「革新2号」はプロペラ機だが、朝鮮半島のような山岳地帯の多い地形では速度よりも運動性能が重要視され、同機は90度に近い急旋回で敵の追撃から逃れることができるばかりか、木製だからレーダーに捉えられず、また体当たりの特攻機としての役割も担っている。「ミグ26」は現在の米国のF/A18に匹敵する夢のスーパー戦闘機として期待されたが、エンジンの安全性に問題があり、旧ソ連（ロシア）では生産されていないが、パイロットの命など何とも思わない北朝鮮ではそのような欠点は考慮されずに生産されている。

熙川38号工場は最も重要なミサイル生産基地で、その604工場ではミサイルの操縦（制御）機器の生産・組み立て、プログラミングが行われ、著者が勤務していた603工場では陸海空軍用無線機が生産され、最も代表的な無線機である「航無10」はF/A18に搭載されている無線機に引けを取らない。咸鏡北道のセッピールにある燃料製造工場は、弾道ミサイルの推進燃料を合成する工場で、近年には細菌兵器の研究も行い、この工場こそ北朝鮮最大の軍需工場である。

また、咸鏡南道新浦から4kmの沖合にある馬養島の潜水艦建造所は中国の技術者の協力によって建設され、潜水艦建造所が「馬養島にある」という言い方は正確ではなく、正しくは新浦から馬養島にかけての海底にある。小型潜水艦・潜水艇はすべてこの建造所で生産され、防水技術は世界水準に達していないが、銀を酸化させたものを使用した独自の水銀バッテリーが使われ、海上で4時間充電を受ければ24時間潜行できるばかりか、ディーゼルエンジンを使用していないので静かで発見され難く、水中では時速60kmでの航行が可能である。

### (Ⅲ)

北朝鮮の弾道ミサイルは単純で原始的な慣性誘導装置で動くので、精度がかなり低いと思われるが、北朝鮮の弾道ミサイルの操縦（制御）部分に取められているのは最新型のレーザー誘導装置で、内蔵されたコンピュータはロシアの人工衛星から送信されてくる情報を受けて姿勢制御ノズルや補助翼を動かし、進路を微調整する。また、北朝鮮の弾道ミサイルは液体燃料で動くため発射準備の燃料注入に何時間もかかると言われているが、燃料は基本的には固体燃料で、いつでも緊急発射できるなど、弾道ミサイル技術は米国とほぼ同じレベルにある。さらに、北朝鮮は弾道ミサイルよりもはるかに命中率が高く、大量殺戮兵器を搭載できる巡航ミサイルも保有し、それは米国のトマホークミサイルとほぼ同じもので、月に3基のペースで生産され、実戦配備されている。この巡航ミサイルの射程距離は現在のところ300km程度で、「来るべき韓国との戦争において、きわめて現実的な使用目的を持った重要な兵器」であり、核弾頭は装備できないが生物化学兵器は装備できる。命中率はトマホークより劣るが、「北朝鮮はピンポイント攻撃で被害を軍事施設だけにとどめようなどとは考えていない」ため、命中率は無用な性能と言える。

他方、北朝鮮はロシアの軍事衛星を自由に使用でき、人工衛星を使って運用される世界の最新鋭軍事技術のすべてを使うことができ、「世界は北朝鮮にだまされているだけでなく、民主化したふりをしているロシアにもだまされているのだ」「ロシアは冷戦でアメリカに敗北したため、その秘めた力を北朝鮮に惜しみなく与え、東アジアで自分の肩代わりをさせている」「北朝鮮の軍事を見る時に決して軽視してはならないのは旧ソ連、そして現在のロシアとの密接なかかわりだ」「北朝鮮がこれだけきびしい目で世界中から見られるようになった今日でも、ロシアは条約ののっとなって北朝鮮に対する軍事援助を続けているばかりか、技術顧問までも送

り続けているのは「ロシアは朝鮮半島全体がアメリカの勢力下に入っては困るため、北朝鮮に武器を与えて朝鮮半島の北半分を守らせている」とし、同じく中国も北朝鮮に軍事援助を続けているが、それは「朝鮮半島が統一されたら、朝鮮民族は満州を我々によこせと言いつつも出さずかもしれない。だから、分裂した状態を維持させようとしている」という。

そして、1993年に北朝鮮がノドンミサイルを発射したとき、北朝鮮はこの発射は「北朝鮮の威信をかけた初めてのデモンストレーション」だから、中国にミサイルを撃墜しないように要請した。しかし、中国はこの要請を無視して撃墜用ミサイルを発射し、中国のミサイルは超高速で飛ぶノドンにかろうじて接近したが、ノドンの先端に組み込まれた装置によって逆にコントロールされ、「反転して自ら発射した中国のミサイル基地めがけて飛んでゆくと、見事に命中してこれを跡形もなく破壊してしまった。ミサイル技術では中国より北朝鮮のほうが優れていた」としている。

#### (IV)

北朝鮮のミサイル実験は、ふだんは主にロシアのカザフスタンで行われ、93年、98年、06年は北朝鮮国内から発射された。2002年3月にポルトン米国防次官が「北朝鮮はミサイル発射実験を凍結していると主張するが、ミサイルを輸出し、輸出先の国で実験している」と述べたように、例えば湾岸戦争中にイラクがイスラエルに向けて発射した32発のミサイルは北朝鮮から持ち込まれたもので、「湾岸戦争における北朝鮮ミサイルの実験結果は、とりもなおさずアメリカのパトリオットが北朝鮮の弾道ミサイルに対して無効であることを示している」と著者はいう。そして、1993年に発射されたノドンミサイルによって粉砕された日本海の岩礁からミサイルの残骸を回収した日本は、ノドンに日本製の部品が使われていることを知って衝撃を受け、密輸の取り締まりを厳しくしたため北朝鮮ではミサイル

の製造が困難になり、ノドンミサイルの製造は20%減産したという。

なお、北朝鮮のミサイルはエンジンがロシア製であることと、一部にドイツなど欧州製品が使われていることを除けば、ほとんどすべて日本製の部品で組み立てて作られ、日本から輸入される軍事関係品で最も多いのはマイクロチップなどの半導体部品で、電子回路に貼り付ける基盤も接着剤も、それらの部品を洗う洗浄剤もすべて日本製だという。

また、ノドンは日本人がテポドンだと考えているものによく似ており、テポドンはむしろノドンとされているものに似ているとし、テポドンはロシアの大型ICBMであるSS18ミサイルの北朝鮮版を作るための実験体で、テポドンから得られたデータをもとにして北朝鮮が作ろうとしている新型のミサイルは全長72mで、射程距離は4万kmに及び、それは金正日が「地球を一周できるミサイルを作れ」と命じたことによる。ミサイルの装薬部分（弾頭）には9発の小型ミサイルが収められているばかりか、重い弾頭を運べるICBMは核を装備しなくても十分脅威になる。そのため、著者は既存のミサイルに「新型の超重ICBMを加えれば、ミサイルに関する限り、北朝鮮とアメリカの戦力はある意味で拮抗している」という。

他方、北朝鮮の核施設といえば平安北道の寧辺のことだと考えられているが、寧辺には重要な核施設は何もなく、いま現在ある原子炉は北朝鮮にとってはどうでもよい付属施設で、カムフラージュのために寧辺に残されているだけだという。それは1993年に国際原子力機関が寧辺の核施設を査察することが決まったからで、北朝鮮にとって本当に重要な核燃料再処理施設はすべて咸鏡南道の金野に移され、米軍も移転は察知したが、移転先は平安北道の金昌里の地下と判断した。真の核施設は金野の地下600mに移転され、ここでは現在も使用済みの核燃料からプルトニウムを抽出して、兵器に使えるように処理する作業が進められているが、

あまりにも地下深くにあるため、人工衛星でも発見できず、核兵器でも破壊するのは困難だとしている。

(V)

北朝鮮には燃料の備蓄がないから戦争を遂行できないという認識も大きな間違いで、各道の地下倉庫（1号倉庫）には5年間戦争を行えるだけの燃料と軍糧が保存され、各郡にある2号倉庫にもやはり燃料や食糧などの備蓄があるが、食料危機になってもこれらの倉庫が開かれることがないのはあくまでも戦争時だけに使われる備蓄であるからだという。また、米軍が北朝鮮と戦端を開いたら、たちまち首都の軍事拠点を爆撃して軍事通信網を破壊し、戦争を継続できないようにしてしまうだろうと言われるが、北朝鮮ではそのような時のために北朝鮮全土の地下1.5mに日本から密輸した光ファイバーが埋設されており、通信網が維持されるようになっている。さらに、北朝鮮の巡航ミサイル基地が黄海北道平山郡と平安北道枇岬（且の代わりに見）郡の山の中腹にあり、著者が勤務した熙川38号工場は地下工場ではないが、付近には地下110mに巨大な空洞が掘られ、熙川38号工場とそっくりの地下工場があるように、その他の軍事施設も50～100mの地下にあり、その間は地下鉄で結ばれているため核爆弾の直撃を受けても、これに耐えて戦争を続けることができるとしている。

他方、金正日が世界征服を企んでいると考えるのは正しくなく、金正日が目指しているのは「あくまで韓国を侵略して朝鮮半島を武力統一し、そこに永久不滅の絶対支配を確立して外部から口を出させないこと」、

「つまり朝鮮半島を自分のものにしたら、あとは鎖国してわがまま放題がしたいのである。そのために、諸外国を脅かす核とミサイルが必要なのだ。その際、最大の障害となるのがアメリカである。金正日は、核とミサイルをちらつかせながら、北朝鮮に有利な『不可侵条約』をアメリカと結んで、その動きを封じようとしている」のであり、その意味で「北朝鮮はアメリカ以外は眼中にない。当然、日本を侵略して占領しようという意図もない。北朝鮮が日本を攻撃する理由はただ一つ、在日米軍基地があるからだ。そして日本がアメリカに対して軍事協力を行っているからだ」という。

そして、韓国は何でも裸で見せているから北朝鮮とは勝負にならず、在韓米軍が撤収し、戦争が起こったとすれば、「北朝鮮は勝つために必要と考えたら、大都会でも原子力発電所でも構わずに狙う」ため、北朝鮮は3日で韓国を占領し、韓国には地下トンネルがないため韓国の人間は逃げるところがなく、皆死ぬであろうとしている。

筆者はミサイル技術や通信技術等に関してはまったくの門外漢であるため、本書の内容については半信半疑というのが正直な感想だが、「軍事では常に最悪の事態を想定して先手を打っていかなければ、国は滅びる」という著者の主張には同感で、その意味で本書は日本にとっての良い警告の書であると言える。

以上、本稿では本書の内容を簡単に紹介してきたが、浅学非才な筆者には的確な紹介ができず、また筆者の不勉強による誤読の可能性もあり、この点については著者のご海容をお願いする次第である。

（徳間文庫、2006年8月、246頁、定価571円+税）